HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	膵頭部癌における門脈浸潤の診断と予後予測に関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	寺村, 紘一
Description	配架番号：2269
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第12480号
Issue Date	2016-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64457
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Koichi_Teramura_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　寺村　紘一

	主査	准教授	神山　俊哉
審査担当者	副査	教授	平野　　聡
	副査	教授	秋田　弘俊
	副査	准教授	本間　明宏

学 位 論 文 題 名

膵頭部癌における門脈浸潤の診断と予後予測に関する研究
(A study of the diagnosis for portal venous invasion and the prognostic prediction of pancreatic head cancer)

本研究は、外科的切除を先行治療とした膵頭部癌症例の予後規定因子を抽出し、予後不良が予測される症例を術前に選別する方法の確立を試みたものである。予後不良な症例を術前に選別することで、適切な治療を提供でき、ひいては生存率の向上が期待できると考えた。研究の結果、得られた予後規定因子は病理学的門脈浸潤、病理学的リンパ節転移、術後補助化学療法の 3 因子であった。このうち、病理学的門脈浸潤を術前の CT 画像で正確に診断する方法について検討を行った。門脈浸潤について 3 つの画像評価基準を設定し、診断能について検討を行った結果、いずれの基準も診断能として有用ではなく、術前に正確に門脈浸潤を診断することは困難であると結論した。しかし、腫瘍が門脈に及ぼす形態学的変化の程度により生存率に差を認めたため、この所見を用いて膵癌症例の予後を一定程度予測できた。この結果は、術前の CT 画像で腫瘍による門脈の形態学的変化を評価し、予後不良が予測される症例に対しては最近研究が盛んに行われている術前治療の適応を考慮する指標となり得ると考えた。

学位論文内容の口頭発表後、副査の秋田弘俊教授より、門脈浸潤のある症例に門脈切除を行い、癌遺残のない切除を行ったにもかかわらず、門脈浸潤を有する症例が予後不良であった理由について質問があった。これに対して申請者は、門脈浸潤と関連する因子の検討の結果、門脈浸潤を呈する腫瘍の生物学的悪性度が高いことが示され、予後に影響していると回答した。また、膵癌の術前治療に関する臨床試験についての質問には、本邦で複数のランダム化比較試験が行われていることを説明した。続いて、副査の本間明宏准教授より、実際の手術における門脈合併切除の基準について質問があり、申請者は、癌遺残のない（R0）切除を達成するため、わずかにでも腫瘍が門脈と接しているものは浸潤陽性と判定したと回答した。さらに、術前に予後を予測するた

めに、術前の因子のみでの検討することについて質問があり、申請者は、各因子の関連性、交絡を考慮した結果、術前と術後のすべての因子について検討したと回答した。続いて、副査の平野聡教授から、年代により CT の機種が異なることによる診断能への影響について質問があった。これに対しては、診断能への影響は否定できないが、設定した診断基準の診断能が低かった結果からは重大な影響はないだろうと考えるが、設定した診断基準について、近年使用している解像度の高い CT 機種での再評価が必要と回答した。術前治療の有用性についての質問には、腫瘍縮小効果による R0 切除率の向上と、術前治療の期間が潜在的な微小転移が顕在化するまでの観察期間として意義がある点で有用であると回答した。最後に、主査の神山俊哉准教授から、予後規定因子の一つであった病理学的リンパ節転移の検討について質問があり、申請者は、所属教室での胆道癌の検討でリンパ節転移の術前診断が困難であったことを提示し、膵癌についても同様の困難性があるだろうと回答した。また、門脈の形態学的変化で予後不良が予測される症例において、術前治療は有用かの質問に対しては、現在のところ術前治療の長期成績が不明であり、エビデンスとして確立されていないため、今後のランダム化比較試験などの臨床試験の結果を待たなければならないと回答した。

いずれの研究内容に対する質問に対しても、申請者はその主旨を的確に理解し、文献的考察を混じえて適切に回答した。また、今後の課題や展望についても、逐次的に解決すべき問題を明確に挙げ、研究結果の応用について自らの考えを示すことができた。

本研究は、膵癌において腫瘍が及ぼす門脈への形態学的変化が予後予測因子となり、治療方法を検討する上で重要な結果であることを示した。この結果が膵癌症例の生存率向上に寄与することが期待される。

審査員一同はこれらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を授与されるのに充分な資格を有すると判定した。